

「塔」 (ホーフマンスタール)

十七世紀のポーランド王国は正に「時代の蝶番が外れた」(「ハムレット」)状態であつた。舊來の價值秩序は崩壊し、權威を失つた王のバジリウスは闇雲に權力にしがみつき、貴族は腐敗し、野心家が跳梁し、反ユダヤ人感情が高まり、民衆の叛亂が頻發した。そんな中、バジリウスは邊境城塞の塔に幽閉してゐた王子ジギスムントを塔から出し、王位に即けて己が權力の維持を圖らうとする。

ジギスムントは生れ落ちるや塔に幽閉されたのだが、それは、バジリウスが一つの預言を恐れた爲だつた。預言によれば、王子はいづれ國土の大混亂の中、叛亂者を率ゐて父王を足下に踏みつけるに至るであらうといふのだ。爾來、ジギスムントは人間社會から隔絶され、狼の毛皮を纏ひ、足を鎖で繋がれ、獸の如き有様で二十年の歲月を過してゐた。

そんなジギスムントを守り育てたのは城塞司令官のユリアンである。ユリアンの教育によつ

て、ジギスメントは逆境にありながらも精神を高められ、指導者としての成長を促される。或る學者の云ふ様に、ジギスメントは「人間の苦惱の象徴」であると同時に、「苦惱から人類を解き放つ使命を擔ふ」指導者としても描かれてゐる。云はばイエスの似姿として、敬虔なカソリック信者のホーフマンスタールがジギスメントを描かうとしたのは間違ひない。しかし、實はユリアンが王子を教育したのは自らの腹黒い野心の爲だつた。王子が即位した暁には、自分が王子を通じて國を支配する事を目論んでゐたのだ。彼はその下工作として、部下の伍長オリヴィエに叛亂を起こさせ、權力の奪取を劃策する。

かうして、バジリウスにとつても、ユリアンにとつても、ジギスメントは己が權力慾を満たす爲の手段でしかなかつた。ジギスメントは相まみえた父王の態度からそれを見抜き、父王を撲りつけ、ユリアンとも袂を分つて、權力慾に據らぬ新しい秩序を打立てるべく自ら國家を導かうとする。けれども、力と力とがあひ争ふ「地獄が荒れ狂」ふ中、オリヴィエは囚人や無法者や社會の落伍者を糾合して叛徒の首領のし上り、精神的價値の一切を蔑み、力の支配こそが世界の「まやかしのない事實」と嘯いて暴威を恣にし、バジリウスもユリアンも殺した擧句、民衆の慕ふジギスメントを傀儡として戴いて、國家を支配しようとする。だが、ジギスメント

はオリヴィエに、「お前はわたしを手に入れることはできない」と云つて傀儡の役割を拒絶する。オリヴィエはそつくりの替玉を探せと手下に命じて、ジギスムントを殺して了ふのである。

「塔」には三つの稿があり、今回紹介したのは一九二七年に發表された最終稿だが、初稿でも主人公は殺されるものの、未來に希望が託される結末となつてゐるのに對し、最終稿の結末は甚だ絶望的であつて、何れの稿が戯曲として出來映えが優れてゐるか、作者の眞實は何れにあるかを繞つて、今も評家の議論は絶えないのだが、出來映えについてはともかく、未來への夢を抱懷し續けるのも、絶望の現實を直視し續けるのも、何れも作者の眞實だと私は思ふ。「希望に反して希望すること」こそは彼が生涯保ち續けた態度だからだ。だが、それにしても、何處までも「希望に反」する人間の現實の本質を、ホーフマンスタールは如何に鋭く見抜いたか。十七世紀ポーランドの混亂を通して、彼は母國オーストリアの第一次大戰に於ける敗戦後の現實、即ち「精神に支へられない力」の跋扈する現實を描いたのだが、力の信奉者オリヴィエをオーストリアの伍長出身のヒットラーの豫示と捉へる評家も少くはないのである。

(岩淵達治譯、ホーフマンスタール選集第四卷、河出書房新社)